第５次レッドデータブック：
絶滅のおそれのある日本の野生生物

The 5th Red Databook, Threatened wildlife of Japan

エラブウミヘビ

Laticauda semifasciata (Reinwardt, 1837)

太田英利（兵庫県立大学）

絶滅のおそれのある野生生物の選定・評価検討会　爬虫類・両生類分科会

環境省 編

令和８（２０２６）年３月

特に文献内で別途指定がない限り、この文献はクリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンスの下に提供されています。

https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja

種毎の解説を引用する場合には以下のように記述してください。

引用表示：太田英利，2026．エラブウミヘビ．環境省（編）第５次レッドデータブック：絶滅のおそれのある日本の野生生物，pp. 302-306.

Citation: Ota, H., 2026. *Laticauda semifasciata* (Reinwardt, 1837). *In*: Ministry of the Environment, Japan (ed.), *The 5th Red Databook, Threatened wildlife of Japan*, pp. 302-306.

有鱗目 Squamata　コブラ科 Elapidae

エラブウミヘビ

***Laticauda semifasciata* (Reinwardt, 1837)**

カテゴリー判定結果　情報不足（DD）　④

基準 A:　データ不足	基準 B:　―	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生息状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

④生活史の一部又は全部で特殊な環境条件を必要としている。

【判断理由】

海岸の洞窟、岩場にできた特定の洞窟内に集まり、その中の陸上部分にできた湿った割れ目などに潜り込んで産卵する。主要な産卵場所の周辺でも海岸の開発による沿岸海流の変化などが生じており（たとえば久高島）、生息環境は悪化している。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

全長は、オス 740～1,330 mm、メス 830～1,410 mm。前額板は 3 枚で、吻端板は上下に二分。腹板は大型で 195～210 枚。暗褐色の横帯が胴部に 35～45 本、尾部に 5～7 本あり、それぞれ腹面では背面に比べて狭く、成体では腹面で不明瞭。琉球列島のサンゴ礁域のほぼ全域に分布。海岸の湿った洞窟内に上陸し、割れ目などに潜り込んで産卵。海岸環境やサンゴ礁環境の悪化、食用目的での捕獲などの人為的影響による個体数の減少が懸念されている。

基礎情報

【形態】

全長はオスで 740～1,330 mm、メスでは 830～1,410 mm。体型は同属の他種に比べて太短く、横断面は胴の前部では丸いが、後方では徐々に側偏し、尾は極端に縦長でオール状。前額板は 3 枚で、吻端板は上下に二分する。体鱗は胴のほとんどで 21～23 列。腹板は大型で 195～210 枚。尾下板はオスで 37～43 対、メスでは 32～38 対。背面は青灰色、腹面はやや青みを帯びた黄色ないしクリーム色。暗褐色の横帯が胴部に 35～45 本、尾部に 5～7 本ある。この横帯は腹面では背面に比べて幅が狭まり、また成体では腹面で不明瞭となる。

【生活史】

産卵上陸の見られる時期は琉球列島内でもエリアによって若干異なり、八重山諸島の石垣島では 5～8 月、宮古諸島の宮古島では 4～7 月、沖縄諸島の久高島では 8～12 月とされ、この時期になると海岸の岩場（おもに琉球石灰岩）にできた特定の洞窟内に集まり、さらにその中の陸上部分にできた割れ目などの湿った隙間に潜り込んで産卵する。一腹卵数は 1～10 程度。飼育下での観察から、ふ化までには 137～159 日を要するとされる。産卵期にはメスだけでなくしばしばオスも同じ場所に上陸し、交尾が見られる。自然条件下での寿命は不明であるが、飼育下では少なくとも 25 年あまりの生存が知られている。餌としてはウツボ、ハゼ、ベラ、ギンポ、スズメダイ、カサゴなどさまざまな魚類が記録されているほか、甲殻類（十脚類）の捕食例もある。

【生息環境】

サンゴ礁の発達した水深 20 m 以浅の海域に多いが、産卵場所の周辺では、例えば沖縄島の中城湾南西部や硫黄島周辺のように、サンゴ礁のあまり発達しない、岩礁や砂泥形質の場所でもよく観察される。

生息環境区分：	【陸域_海岸部】洞窟・地下浅層 【海域（沿岸）_表層】岩礁（磯），サンゴ礁，砂底・礫底
国土地域区分：	（5）沿岸域，（7）島嶼地域

【分布域】

東シナ海のうち、サンゴ礁の発達する浅海域のほぼ全域に見られる。産卵場所は北琉球の硫黄島、口永良部島、諏訪之瀬島、中琉球の小宝島、宝島、与論島、久高島、南琉球の池間島、宮古島、石垣島、西表島、仲の神島などから知られる。国外では南シナ海東部、フィリピン周辺海域を経てスラウェシ近海、モルッカ近海に至る南北に長く東西に狭い範囲に分布する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

活動個体は琉球列島のほぼ全体の浅海域で観察されているが、30 m を超える深い場所に

はほとんど見られず、また、同じ国内の亜熱帯海域でも、尖閣諸島、大東諸島、小笠原諸島などの近海では、ほとんどないし全く記録がない。小笠原諸島の兄島などからも、近年、継続的な目撃情報があるらしく、今後調査が必要となる。九州地方以北の本土の近海でも発見されることがあるが、これらは黒潮に運ばれた漂着個体とされ、本土周辺では繁殖地は確認されていない。

【生息地の現況】

琉球列島浅海域のサンゴ礁域の多くで、1980 年代以降には陸域の開発にともなう赤土の流出やオニヒトデの大量発生で、また 1990 年代の後半以降には、夏季の高温海水塊の影響による白化や死滅、ガレ場化、藻場化が進んだ。それにともないサンゴ礁魚類の密度や多様性も低下しており、多くの場所で餌条件が悪化していると思われる。また主要な産卵場所の周辺でも海岸の開発による沿岸海流の変化などが生じており（たとえば久高島）、生息環境は悪化している。

【個体数の現況】

多くの産卵場所で、上陸する個体数の減少傾向が示唆されており、近年、個体数が減少しているのはほぼ確実であるが、具体的な個体数や減少率は不明。

存続を脅かす要因

海岸の開発にともなう産卵環境の悪化、赤土の流出や夏季の高温海水塊の出現にともなうサンゴ礁の縮小、さらには食用を目的とした無計画な捕獲やさし網などによる混獲などが存続を脅かしていると思われる。

要因の区分：	（過去）	海岸開発，洞窟の消失や環境悪化，捕獲・狩猟/園芸採取，気候変動
	（現在）	海岸開発，洞窟の消失や環境悪化，捕獲・狩猟/園芸採取，気候変動

特記事項

エラブウミヘビ亜科の種は近年、ウミヘビ亜科やウミガメ類など他の海棲爬虫類と違い、海水から水分をまかなう能力に乏しく、陸域からの水供給に依存する割合が高いことが明らかになり、生理生態学的に注目されている。また近年のミトコンドリア DNA を指標とした集団遺伝学的研究から、遺伝的多様性が非常に高く、深い海域で隔てられたエリア（台湾（蘭嶼）、南琉球、中琉球、北琉球）間で遺伝子流動が制限されていることが明らかになった。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	エラブウミヘビ	*Laticauda semifasciata*	VU
第４次 2019：	エラブウミヘビ	*Laticauda semifasciata*	VU

第４次 2018：	エラブウミヘビ	*Laticauda semifasciata*	VU
第４次 2017：	エラブウミヘビ	*Laticauda semifasciata*	VU
第４次 2015：	エラブウミヘビ	*Laticauda semifasciata*	VU
第４次：	エラブウミヘビ	*Laticauda semifasciata*	VU
第３次：	エラブウミヘビ	*Laticauda semifasciata*	VU
第２次：	—	—	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【宮崎県】情報不足(DD-2)，【鹿児島県】準絶滅危惧，【沖縄県】準絶滅危惧(NT)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

指定なし

参考文献

- Kuwabara, R., R. Shimizu, and T. Haneda, 1990. Ecological considerations on the sea snake *Laticauda laticaudata* in the Ryukyu Islands from trends in the catch. In: R. Hirano and I. Hanyu (eds.), The second Asian fisheries forum, pp. 773–776. Asian Fisheries Society, Manila, Philippines.
- Lillywhite, H. B., L. S. Babonis, C. M. Sheehy, III and M. C. Tu, 2008. Sea Snakes (*Laticauda* spp.) require fresh drinking water: Implication for the distribution and persistence of populations. Physiological and Biochecal Zoology, 81(6): 785–796.
- 増永元，2005．エラブウミヘビ．沖縄県文化環境部自然保護課（編），改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物（動物編）－レッドデータおきなわ－，pp．129‐130．沖縄県文化環境部自然保護課，那覇．
- Masunaga, G., T. Kosuge, N. Asai and H. Ota, 2008. Shark predation of sea snakes (Reptilia: Elapidae) in the shallow waters around the Yaeyama Islands of the southern Ryukyus, Japan. Marine and Freshwater Biodiversity, 1(e96): 1–4.
- 太田英利，1995．エラブウミヘビ．日本水産資源保護協会（編），日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料（II），pp．463‐468，479．日本水産資源保護協会，東京．
- 太田英利，2003．エラブウミヘビ．鹿児島県環境生活部環境保護課（編），鹿児島県の絶滅のおそれのある野生動植物 動物編 －鹿児島県レッドデータブック－，p. 94．財団法人鹿児島県環境技術協会，鹿児島．
- 太田英利・増永元，2005．琉球のウミヘビ．矢野和成（編），南の島の自然誌，pp．159‐172．東海大学出版会，秦野．
- 高橋寛，1984．琉球列島におけるウミヘビ類の頻度．The Snake，16: 71‐74．

- Tandavanitij, N., H. Ota, Y. C. Cheng, and M. Toda, 2013. Geographic genetic structure in two laticaudine sea krait. *Laticauda laticaudata* and *Laticauda semifasciata* (Serpentes: Elapidae), in the Ryukyu-Taiwan region as inderred from mitochondrial cytochrome b sequences. Zoological Science, 30(8): 633–641.
- Toriba, M. and E. Nakamoto, 1987. Reproductive biology of Erabu sea snake, *Laticauda semifasciata* (Reinwardt). The Snake, 19: 101–106.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Laticauda semifasciata has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Laticauda semifasciata* is listed as DD under criteria ④.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

④Specialized habitats are required at some or all stages of its life history.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Beach】Cave/Shallow underground 【Marine area (Coastal area)_Surface water】Reef, Coral reef, Sandy bottom/Gravelly bottom
Threat types:	Coastal development, Loss of caves and environmental deterioration, Hunting and collecting animals/Gathering plants, Climate change
Law designation status for conservation	—


©笹井隆秀（沖縄美ら島財団）


©山本拓海（東邦大学）

執筆者:	太田英利（兵庫県立大学）
Author:	Hidetoshi Ota

公表年月：2026 年 3 月